



教授の呟き

第54回

再再考、中抜き論と中継論

東京海洋大学教授

苦瀬博仁

●●● 流通チャネルで考える

生産者から消費者へ商品が流れていく道筋を、流通チャネル（流通経路：Distribution Channel）という。業種で示せば「製造業（生産）→卸売業→小売業」（業種間チャネル）となるが、施設で示すと「工場→流通センター→店舗」（施設間チャネル）になる（図）⁽¹⁾

連載の第4回目に「『中抜き』はさまざまな角度で検討が必要」を書いた。当時話題となっていた「製販直結の流通チャネル（卸売業の中抜き論）」を題材に、卸売を中抜きして直送すべきか、それとも卸売を経由すべきかを考えたものだった。第41回目では「『台キロ』から見た共同配送の効率」として、配送距離の削減可能性について考えてみた⁽²⁾

今回は、業種間チャネルにおける卸売業と、施設間チャネルにおける流通センター（中継地）を比較して考えてみたい。

●●● 卸売の中抜き論と中継論

「卸売の中抜き論」とは、業種間チャネルの議論である。卸売を省いて生産と小売を直結すれば、流通の簡素化が進み、流通改革ができるという考え方である。

流通や物流を勉強する人にとって必読の書のひとつに、いまから40年以上前の昭和37年（1962）に発行された「流通革命」がある。筆者の理

解では、流通機能の変化（流通加工の増加や、生産流通の統合など）と、流通制度の変化（小売業界における量販店の台頭と、卸売の中抜き論）が述べられていた。特に後者については、スーパーマーケットの発展や、生鮮食品の市場外流通などを、言い当てている⁽³⁾

一方で、中小小売店にとっては、卸売業が必要不可欠なことも多い。なぜなら、小さな小売店が商品ごとに数多くのメーカーと直接取引をしたり、在庫を持つことは不可能に近い。

だからこそ、卸売業の商品提供力や品ぞろえ機能に頼らざるを得ない。さらには売れ筋情報の収集と提供や資金力による金融機能もある。それだけに、物流機能や情報機能に活路を見いだしながら、現在も活躍している卸売業は多い。

つまり業種間チャネルにおいて、製販直結の「中抜き論」と、卸売業による「中継論」は併存しているのである。

●●● 配送の中抜き論と中継論

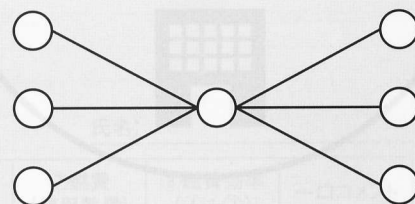
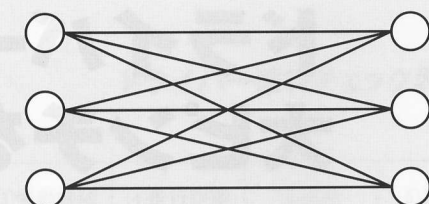
次に、施設間チャネルを考えてみよう。

工場から流通センターを経由せずに店舗に直送すれば、図式としては、卸売の中抜き論と同じである。少品種の製品を大口で輸送するのであれば、途中で寄り道することなく、直送した方が効率的なことは間違いない。

中抜き論と中継論の特徴

【中抜き論】

【中継論】



業種間チャンネル
施設間チャンネル

(生産) (工場) (小売) (店舗)

(生産) (工場) (卸売) (センター) (小売) (店舗)

業種間チャンネル

事例 メーカーと小売りの直結
目的 流通経費削減
特徴 大量仕入れ・大量販売

集約仕入れ・小口販売
取り引き回数の減少
少量仕入れ・少量販売

施設間チャンネル

事例 工場倉庫間輸送
目的 寄り道排除、経路短縮
特徴 少品種大量輸送

積み合わせ輸送、共同配送
積載率の向上、台数削減
多品種少量配送

一方で宅配便やコンビニの配送のように、多くの地点に少量ずつ配送するのであれば、それぞれ直送すると積載率も低くなり、トラックの台数も増えるために、中継地で積み合わせる方が効率が良い。

もちろん中継地の位置によって、トラックの走行距離が増加することもあるが、少なくとも到着地でのトラックの台数を減らすことができる。このためコンビニは、流通センターで店舗別に品ぞろえをしてから配送している。⁽⁴⁾

つまり施設間チャンネルにおいても、直送という「中抜き論」と、積み合わせや共同配送という「中継論」は併存しているのである。

の違いはあるものの、どうやら卸売業も流通センターも、「中継」という意味では同じような特徴を持っているようだ。

少品種大量取引であれば、卸売業や流通センターを省き、直結する方が良いだろう。逆に多品種少量取引であれば、卸売業や流通センターを経由した方が良さそうだ。

結局のところ、「中抜き論」と「中継論」はケースバイケースである。

だからこそ、どちらが有利かを判断するための分析力が必要とされている。

- (1) 苦瀬博仁：「付加価値創造のロジスティクス」、税務経理協会、99年
- (2) 苦瀬博仁：教授の呟き、第4回「中抜き」はさまざまな角度で検討が必要」、第41回の「台キ口」から見た共同配送の効率」、流通設計21、03年4月号、06年5月号
- (3) 林周二：中公新書4、「流通革命」、中央公論社、62年、増訂版77年
- (4) 飯岡・苦瀬・石川・岩尾、「中継地の位置の違いを考慮した走行距離と走行台キ口の変化に関する共同配送の事例分析」、日本物流学会誌、第14号P157-164、06年05月

Profile

東京海洋大学 海洋工学部
流通情報工学科 教授

苦瀬博仁

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により、東京海洋大学教授。副学部長、評議員を経て、06年4月より流通情報工学科長。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(併任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通—都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)、「都市の物流マネジメント」(勁草書房) <http://www.kaiyodai.ac.jp/kuse/>



求められる分析力

業種間チャンネルと施設間チャンネル